

ルナリアとレーグンドラの戦いは激しさを増していた。

ルナリアは、大陸全土に覇を唱えんとする大国である。国土の面積は大陸の四分の一を占め、その人口は五千万人を超える。保有する常備軍は騎兵・歩兵合わせて五〇万に達し、その気になれば全土から数倍の兵力を動員することも不可能ではなかった。

一方、レーグンドラは、国土の面積、保有する兵力、総合的な国力など、全ての面でルナリアに劣っており、数値として表すならば半分以下でしかない。唯一、ルナリアに勝る点があるとすれば、国の歴史の古さだろうか。ルナリアは、国として成立してからまだ二〇〇年ほどしか経っていないが、レーグンドラの歴史は一〇〇〇年を超えているのである。レーグンドラは古い国なのだ。

もちろん、国同士の戦いに歴史の優劣など関係はない。戦いに必要なのは兵力であり、それを支える国力だからだ。ゆえに、国としての規模が巨大なルナリアが、規模が小さなレーグンドラを圧倒するのは自然の摂理のように当然のことだと思われた。

だが、いくさは奥が深い。当初はルナリアの優位に進められていた戦いだが、レーグンドラの逆襲によって戦況は一変し、いまやルナリアは攻める側から攻められる側へと立場を変貌させ、国内をレーグンドラ軍によって蹂躪されるという憂い目にあっていた。

レーグンドラ軍の侵攻は蛮行を極めた。自国を攻められたことに対する報復でもするかのよう、レーグンドラ軍は進む先々で田畑を荒らし、村を焼き、市や町で略奪の限りを尽くし、人々を殺しまわって、ルナリア国内で暴虐の限りを尽くした。

この状況を打破すべく、ルナリアは兵力を結集させ、一大反攻作戦をおこない、国内からレーグンドラ軍を一掃するつもりであった。

そのため、結集していた軍にその情報もたらされた時、多くの将軍や指揮官たちは相手にせず、無視してしまった。

それは地方から送られてきた嘆願書であった。「見たこともないバケモノによって周辺の町村が襲われています。犠牲者の数は三〇〇人を越え、抵抗した男たちは皆殺しにされ、若い女が次々とさらわれてしまいました。どうか助けてください！バケモノたちを討伐するために兵を送ってください！」

軍はこの嘆願書を完全に無視してしまった。罌や狼による害獣被害は毎年のように発生しているし、辺境に住むオーガ族やゴブリン族が国境を越えて集団で人を襲うことはよくあることだからだ。被害の規模も三〇〇人程度であれば少ないほうだ。それよりも、レー

ゲンドラ軍をどうにかする方が、軍にとつてはよほど重大で先に解決すべき事案であった。なぜならば、レーゲンドラ軍によつてもたらされる被害のほどは、嘆願書に記されていた被害の千倍を優に超えていたからである。

かくして、事態は悪化の一途を辿ることになる。

エクリアの猛威は、まだ始まったばかりなのだからだ。

\*

……かつてその洞窟は、錬金術師たちの集団〈新たなる種の起源〉のアジトのひとつであった。

洞窟は広大で、入り組んでおり、奥に深い。中には実験に必要な様々な器具や機材、薬品、標本、様々な原料、それに膨大な資料や実験記録が保管されており、それらは同量の黄金よりも貴重な品々ばかりであった。

ここでエクリアは活動を活発化させていた。

エクリア。外見は少女の姿をしており、身体的な構造も人間と遜色がない造りとなっている。しかし、彼女は人間ではない。〈新たなる種の起源〉によつて人工的に創りだされた錬金生物である。

彼女は自らを創りだした錬金術師たちに使命を託されていた。

「人間は邪悪な生き物だ。この世に存在してはならない種族だ。殺せ。絶滅させる。それがダメなら、獣以下に墜せ。この星のために、他の全ての生物・種族のために、人間を超越する新たな種を繁栄させるのだ！ おまえはそのために生みだされた〈神〉なのだか  
ら……」

ゆえに、であろうか。人間に似た姿形をしていながらも、エクリアにとつて人間とは家畜以下の存在でしかなく、唾棄すべき敵としか見なしていなかった。

エクリアの行動は未だ水面下の域をでない。満を持して使命を遂行に移すにはまだ準備が整っていないからだ。いまはまだ、雌伏の時であることを、彼女はその冷徹で明晰な頭脳ではっきりと自覚していた。

「……」

無表情のまま、エクリアが闇の奥へと向かつて歩を進める。その先からは、叫喚めいた無数の悲鳴が聞こえてくる。

「いやあ、いやあああああああああああッ！」

「あひいいいいッ、あひいいいいッ、あぎひいいいいいいいいッッッ！」

「いやああああッ！　お願いッ、助けて、もうやめてええええッ！」

「苦しい、痛いッ、いやあ、さけ、裂けちゃう、裂けちゃうッ！」

「おかーさん、いやああああッ！　おかーさん、助けて、おがああああさああんッ！」

鼓膜を貫くような絶望に満ちた叫び声。それは周辺の町村から拉致してきた女たちの悲鳴である。歩を奥へと進めるつど、叫喚の音量はその度合いを高めてゆく。悲鳴と絶叫が交錯するその場所にエクリアが到達した時、そこでは吐き気を催すような醜悪な魔の狂演が催されていた。

この洞窟内において、もっとも広大な領域であるここでは、無数の炎が照らしだす暗明かりのなか、エクリアが「混合種」と名づけた人外のバケモノたちと、人間の若い女たちによる、一方的かつ加虐的な集団繁殖行動がおこなわれていた。

肉がうねっている。そう見えた。さらわれてきた女たちは衣服や身につけている全ての物を引き剥がされ、全裸にされて、その肉体を蹂躪されている。拒否や拒絶、抵抗の行動は無意味。バケモノたちはそのどれもが女たちよりも大きく、力も圧倒的であった。

女たちはバタつく手足を押さえられ、動きを封じられ、その身体を力任せに蹂躪された。吐き気を催すような汚臭が漂う口での接吻を強要され、唾液を舐めとられ、ヤスリのようにザラザラとした舌で乳房や肌を汚され、乳首に鋭い牙を突き立てられ、尻肉を揉まれ、秘肉を広げられ、そして、そして――。

女たちの叫び声が木霊する。

「いやああああッ、やめてええええええッ！」

「助けて、助けてえッ！　誰かあああああッ！」

「ひいひいひいッ！　ぐううううううッ！」

拒絶や、助けを求める哀れみに満ちたその声は、どんなに高く大きく放つても、バケモノたちの耳には届いても、心まで突き刺すことはない。

女たちの目には、怒張するバケモノたちの肉棒が映っていた。それを見ただけで、自分たちがこれから何をされるのか、ほとんどの女たちはわかっていった。わかっていないのは、性の知識のない、まだ人間の男性と通じたことがない女たちである。

繁殖行動は、一方的かつ加虐的であった。

何十匹ものバケモノたちが何十人もの女たちを犯す。単体で、あるいは集団で、休む間を与えることなく入れ替わり犯し、精を解き放つ。異臭を放ち、悪臭を漂わせる、血管が浮き上がった太い肉棒を天に向かってそそり立たせながら、本能に忠実であるかのように、人間の女の雌穴へと容赦なく挿入していく。



そこで彼女を待っていたのは、「交配実験」と称された強姦の地獄であった。それは生殖機能を持つ錬金生物・アダムによる一方的な性行為の強要であり、懐妊の強制であった。性行為は一度だけでは終わらず、昼夜を問わず何度も何度も繰り返しておこなわれた。その過程でペロニカの精神が完全に崩壊してしまっても、容赦なく続けられた。そしてペロニカは、アダムの仔を何度も孕むことになり、幾度となく繰り返し出産させられることになったのである。

本来、人間の女性が妊娠した場合、出産にいたるまでには一〇ヶ月以上の月日が必要だといわれている。しかし、ペロニカは、一〇日程度のサイクルで次々と妊娠と出産をおこなわされた。

なぜそんなことができたのか。

理由は、エクリアがペロニカに胎児の成長を促進させる薬物を投与したからである。元々その技術は、〈新たな種の起源〉に所属する錬金術師たちの研究の成果のひとつであったのだが、それをエクリアが独自に研究を進め、実用可能な代物へと昇華させることに成功したのである。しかもそれは、母体となる人体には一切の副作用がないという優れ物として。エクリアはこれを「成長促進投与剤」と名づけた。

副作用がない薬品という物は、ある意味では恐ろしい代物である。人体になんの害もないとなれば、連続しての投与が可能というだけでなく、その量も考慮する必要がないからだ。ゆえに、この成長促進剤は、ペロニカだけでなく、他の拉致してきた女たちにも容赦なく投与されていった。

エクリアが女たちに近づいてゆく。無表情のまま、ゆっくりと。その手には緑色の液体が満たされた注射器具が握られていた。それを見て、懐妊の兆候が見られる女たちが悲鳴をあげた……続きは本編で。